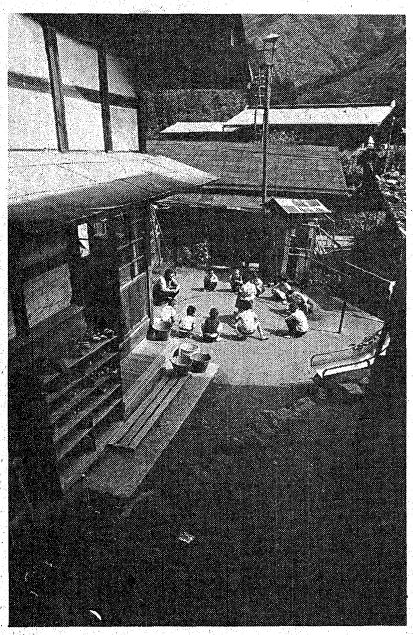
（5）　第3種郵便物認可　上毛新聞　昭和46年7月21日　（水曜日）

すりばち学校
山田修さん
きご先生去る

一、二年生七人（左側）と、四人の未就学幼児がいっしょに勉強



山に囲まれた校庭は文字どおりすりばちの底のように見える

「きご先生、ついに山を去る決意」などといってもピンとこないかも知れない。しかし「きご先生とすりばち学校」写真集「すりばち学校のこどもたち」などを読む人なら「あ、あの先生か」と思い出されるであろう。多部郡上野村東小学校野栗沢分校につとめて二十三年、教壇を山奥の小学校一二年生のために去った一教師、しかも教材、教員いっさいをみずからの出費による印刷でかせぎ出した名の先生が、ついに来春山を去る決意をしたのである。

現在校長になる一日、名の先生、山田修さんが、ぽつぽつと語りはじめた。

八高嶺の麓野栗沢分校は、一学年一人、二学年二人、三学年一人、四学年一人、五学年一人、六学年一人の合計七人の小学校。ただ、この学校は、一度廃校になったことがあるという。

「八月一日、とつ切りというものに問、下久保ダムの建設が始まり、ダム建設のため、一度廃校になったのです。ダムの建設は、ほぼ完了しましたが、廃校の話はいまもなお、生きています。」

「校舎は、もともと、ある人の別荘だったものを、学校にしたものです。校舎は、一見学校とは思えない。」

「廃校の話はいろいろ、ありました。一度は、ダムの建設が完了するまで、という話もありました。また、もっとひどい話では、校舎をテニスコートにしたいから、校庭をテニスコートにしたいから、立ち退け（二千坪）とあるが、その中にテラコッタ、すべり台、鉄棒や鉄小屋があるので、歩く部分はそのまま残さなければならない、などの話がもち込まれ、ダムの建設が完了するまで、二年間、廃校の話はなくなったのです。」

「ダムの建設が完了するまでは